

英国のアロットメント (allotment : 市民農園) 訪問記

(一社) JC 総研 基礎研究部 客員研究員 和泉真理

夕方 6 時、「これから夕食のサラダをアロットメントに採りに行くけれど、一緒にどう？」とハミルトン夫人に誘われた。ここヘイワーズ・ヒース市はロンドンから南に 65km、人口 2 万 3000 人の町である。急行が止まる英国としては中規模の町であり、電車で 45 分のロンドンあるいは車で 15 分のガトウィック国際空港に通勤する住民が多い。

ヘイワーズ・ヒース市には市の所有する 4 カ所のアロットメントがある。その 1 カ所、車で 3 分も行かない住宅地のはずれの、ちょっとした谷地を利用した広大なアロットメントに同行させてもらった。ハミルトン夫人はここに 6 年前から約 4 ロッド相当 (ロッド : rods : 英国の古くからの面積の単位。1 ロッドが約 25 平方メートル) の区画を借りている。4 ロッド、約 100 平方メートルは、標準サイズの半分くらいとのことだ。英国の関連サイトを見ると 10 ロッドが標準サイズとあったが、いずれにせよ日本の市民農園の水準 (例えば東京都調布市では 1 区画平均 21 平方メートルである) に比べれば相当広い。

入り口の鍵を開けて入ると、中の長い一本道の両側に区画が並ぶ。といっても、別に境界の目印がついているのではなく、それぞれの区画の所有者の作目の違いから、ここが境界かと判断できる程度である。皆自分の区画内にグリーンハウスや物置などを設置しており、花壇の多い区画、果樹の多い区画など思い思いの農園ができています。ハミルトン夫人の区画は野菜が中心で、小さなグリーンハウスが 1 つ、果樹が 2~3 本、小さい子どもたちが管理する畝も別途並んでいた。レタス類など葉もの、インゲンなどの豆、ラズベリーやブラックベリーなどが判別できた。小雨の中だが、農作業をしている夫婦もおり、ハミルトン夫人も週 1 回はここに来るといいます。賃料は年 22 ポンド (約 5000 円) で、ずっと借り続けることができるが、管理が悪いと没収されるそう。食の安全志向の高まりで、有機野菜などを作りたい人や、庭が狭く菜園スペースのとれない新興住宅の住人が増えているため、近年アロットメントの人気は上昇している。ヘイワーズ・ヒース市でも借りたい人の長いウェイティングリストがあるそう。「でも、もっと広い庭のある家に移って、自分の庭に菜園を持ちたい

わ」とハミルトン夫人。一方、英国特有の広い裏庭のある家に住んでいても、昔のように菜園を作る人は減っているようだ。

英国のアロットメントの歴史は、大地主制度のもと小作農が共有地の一角で自家用の野菜などを生産する場所を囲ったものが原型で、エリザベス1世時代にその名称が出ているなど長い歴史を持つ。しかし、現在までの法的な発展のきっかけは産業革命による都市労働者の増加と、農業での農地囲い込みの進展と言えよう。都市に集まってきた貧しい工場労働者の不満解消や生活改善への対策、囲い込みによりそれまで自家野菜などを作っていた共有地を取り上げられた小農への対策として、アロットメントは法的に整備されてきた。現法体系のもとでは1908年の「小規模の土地及びアロットメント法」であり、従って今年にはアロットメント法整備100周年と言える。現在は「1950年アロットメント法」が法的根拠となっているが、内容自体は、関連法規（「地方自治体の土地計画法」、「土地田園計画法」など）によって改訂を重ねている。

このアロットメント法の大きな特徴は、地方自治体がアロットメント設置についての要望に対応してその設置を義務づけられている点である。実際にはアロットメントの設置状況は、その年代の土地需要の状態や地方自治体の熱意の度合いによりさまざまな中、全体的には減少しているが、法的に保護されたアロットメント自体は脈々と存在し続けている。同時に、短期的アロットメント、あるいは私設のアロットメントもある。

英国のアロットメント全体の数は正確には把握されていないが、英国アロットメント協会のホームページによれば、戦時中の「勝利のために耕せ運動」時の約140万カ所をピークに、1970年代までには50万カ所と急減した。しかし、1970年代に、自給率向上への関心と人気テレビ番組の影響でアロットメントの人気は急上昇する。その後、好景気に伴う土地価格の高騰による転用需要の増加、ロンドンなど大都市での空き地開発の進展のなかで、1996年には28万カ所に減った。そして今またアロットメントブームの再来である。今回の背景には、遺伝子組み替え食品や多くの化学物質を用いた農業および食品に対し、自ら安全な食を確保したいとの需要がある。都市近郊住宅地の建設や大都市への移民の流入を背景とした需要も増えている。社会全体から見れば、アロットメントは以下のようなメリットがあると考えられている。

- 新鮮で、多くの場合有機生産の野菜や果実が得られる

- 地域に知人を増やし地域にとけ込む機会を提供する
- 運動する機会、リラックスする機会を提供する
- 堆肥の活用によりリサイクルの推進がなされる
- 都市において緑地を確保する
- 生物多様性の維持・強化に貢献する
- 子どもたちへの教育の場を提供する

夕食には、早速、アロットメントで収穫した 2 種のレタスを使ったサラダが並んだ。私は東京の郊外に住むが、近隣の市民農園は人気が高く、なかなか抽選に当たらないとの話も聞く。日本において大量の農村人口が都市に流入して約半世紀。日本の市民農園でも上記のようなメリットは共通のものであろうし、1970 年代に英国で自給率向上のためにアロットメントが増えたとの経験は、自給率 40%の日本での市民農園にも通じるのではないか。日本においても市民農園の意義を農業以外の側面からきちんと評価し、都市やその周辺に散在する農地を市民農園としてもっと公的に位置づけられないものかと、鮮度満点のレタスを頂きながら考えた次第である。

(2008 年 8 月)

写真はいずれもハイワーズ・ヒース市のアロットメント

上：ハミルトン夫人のプロットの野菜の畝と温室、倉庫。

下：周辺の住宅地とアロットメント

